

肝・胆・膵の語源について

長崎市・田上病院顧問

土 屋 涼 一

長 崎 県 医 師 会 報 別 冊

平成9年7月・第618号

肝・胆・膵の語源について

〈長崎市・田上病院顧問〉 土屋 涼 一

はじめに

消化器外科とくに肝臓、胆道そして膵臓の外科を専攻してきたが、臨床の実際から離れつつある昨今、肝・胆・膵の外科史でも書こうかと思いたったところ、ふと、これらの臓器をヒトは何時発見し、そして命名したのであろうかという疑問を抱くようになった。以下は上記の疑問に答えるべく調査した記録である。

1. 肝と膽について

1) 漢字の肝・膽の字は何時出来たか？

手元にある覆刻版ではあるが、1774年杉田玄白等によって刊行された解體新書には、肝膽篇として記述され図も画かれている。

わが国にも太古以来固有の医術があったと思われるが、5世紀始め(414年)新羅の金武が来朝し、允恭天皇の病気を治し韓医方を伝えた。また459年には高麗の徳来がきて韓医方をひろめた。6世紀中頃(562年)呉の知聡が薬方書、医書を多数たづさえて帰化した¹⁾。7世紀以降は遣隋使、遣唐使らによる中国との正式な交流により、中国医学が直接輸入されるようになった²⁾。そして“肝”も“膽”も中国より齎された漢字であった。

荘子は、紀元前4世紀後半(370BC頃)宋の蒙に生まれたという。今日の「荘子」の書は、前漢はじめの紀元前2世紀までの約150年間に、荘子学派によってまとめられたものと思われる。「荘子」は33篇から成り、内篇として7篇、外篇が15篇、雑篇が11

篇にわかれており、内篇が荘子自身の説いたものに最も近いと考えられている。その内篇の第五の徳充符篇の一に、「仲尼曰、自其異者視之、肝膽楚越也」とある。「其の異なる者より之れを視れば、肝膽も楚越なり」であって、訳注者金谷 治氏は、「孔子は答えた、ものごとはそれぞれちがうという点からみると〔同じ体のなかの〕肝臓と胆嚢との隔たりでさえ楚と越のあいだほどにもひらくことになる」と訳している³⁾。第六の大宗師篇の六には、「假於異物、託於同體、忘其肝膽、遺其耳目、反覆終始不知端倪」とあり「異物に仮りて、同体に託し、其の肝胆を忘れ、其の耳目を遺れ、終始を反覆して端倪を知らず」と読むが「さまざまな異類の物を借り集めてかりに一つの〔人間の〕体になり、その肝臓や胆嚢などの内臓のことも忘れ、耳や目などの外形のことも忘れ、生死の循環をどこまでもくりかえして、その始まりがどこかわからない」の意である⁴⁾。なお第十九の外篇の達生篇の十三にも「忘其肝膽、遺其耳目」という文がある⁵⁾。すなわち西暦紀元前4世紀ごろには、肝、膽の言葉も字も存在していたと考えられるのである。

中国には最古の医学書として「^{こうていだいけい}黄帝内経」がある。黄帝とは紀元前二千数百年前に中国の統一をなしとげたといわれる伝説上の人物である。中国の歴史は、三皇五帝ではじまるとされている。三皇とは伏羲、^{ふつぎ}女媧、^{じょか}神農の三人であり、五帝とは黄帝、^{ていせんぎよく}帝顓頊、^{こうよう}高陽、^{こくこうしん}帝嚳、^{こくこうしん}高辛、^{こくこうしん}帝堯、^{こくこうしん}帝舜の五人である。司馬遷(145/135~87/84BC?)は史記をあらわし

たが、三皇を無視し黄帝から書きはじめた。現在の史記には三皇も書かれているが、これは唐の司馬貞が補ったものである。黄帝は、神農の子孫らと戦って大勝し中原を統一した。黄土地帯のあるじということで「黄帝」と名づけられたのであろう⁶⁾。

黄帝内経は、黄帝がその臣である岐伯ら6人の医者と問答した形式になっており、「素問」は上古天真論一から解精微論八十一に至るまで81篇からなり、その内容は人体の生理や病理、病因、解剖、脈論、衛生などの基礎医学に相当するものから、養生法や摂生などやさらに鍼の刺し方や灸のことも論じている。一方「靈枢」は、九針十二原第一から、癰疽第八十一に至るまでの81篇からなり、その内容は解剖や生理、経絡、鍼灸、按摩などについて述べられている。この「靈枢」が比較的多く解剖学を取扱い、内部構造として、肝、心、脾、肺、腎の五臓と、胃、小腸、大腸、膽、膀胱、三焦の六腑をあげていて、肝と膽の字がみられるのである。

さて黄帝内経は何時作られたのであろうか？

「素問」は、戦国時代(453~221 B. C.)における多くの医家が、それまで口にし耳にしてきた歴代の経験を取り集めまとめたものであって、前漢や後漢の時代のものも混入しているといわれ、そのうち最も早い著作時代はおおよそ紀元前4世紀、最も遅いのが大体2世紀の作で、なかには3世紀以後の記述も混入している。一方「靈枢」が著わされた時代は、新旧入り混じってあって、古いものは戦国時代の作で、そのうちの何篇かは「素問」より古く、新しく著わされたものは紀元前3世紀から1世紀頃までの前漢や後漢時代の作といわれている⁷⁾。以上、「黄帝内経」も「莊子」と同じく、紀元前4世紀頃の戦国時代に書き始められたと考えてよいと思われる。

2) 肝・膽の字の由来と漢字のはじまり

“肝”のつくりの干は、廣漢和辞典による

と、干は幹に通じ、おやばしらの意。肉体の中の重要な部分、きもの意を表す、とある。一方“膽”のつくりの詹は同辞典によれば、詹は𠂔に通じ、ひさしの意。肝臓をひさしのようにして位置する器官、きもの意を表す、とあり常用漢字は俗字の胆を用いる、とある。なお胆は膽の俗字として用いられてきたが、元来“臙”の略字で“はだぬぐ”の意味がある⁸⁾。一方、加藤常賢⁹⁾によると、肝のつくりの干は、多くの注釈書は「幹」即ち木幹で説明しているが、むしろ小竹幹(小竹)で説明すべきである。思うに肝臓の動脈管からその名を得たのであろう。そして、小竹管のごとき血管のある臓器の意である、としている。これはまことに驚くべき見解であって、若しもこれが真実であるとするならば、“肝”という字が出来る以前に、ヒトまたは動物の肝についての解剖学的知識がある程度は得られていたと考えざるを得ない。なお膽については加藤は、詹は「甌」(甌)の形の意で、胆嚢の形が甌に似たところから名を得た、という。膽についても、肝をひさしにしている器官であるにしろ、甌の形に似た器官であるにしろ、やはりヒトまたは動物の解剖によって得られた知識に基づいて作られた字であると思われる。

漢字の作り方と使い方に関する根本的な原則とされる六書は、前漢の末期あたりに、経書に注釈を加えていた訓詁学者が、文献中に使われている漢字を分析してそれぞれの意味を考察した過程の中で導き出した理論と考えられる。この理論を漢字に対して全面的に適用したのが後漢の許慎で、「説文解字」という中国最古の文字学書を著した。六書は、
・象形(目に見える事物を絵画的に描く方法)
・指事(抽象的な概念を記号的に表わす方法)
・会意(意味を表わす要素を組み合わせる方法)
・形声(意味を示す要素と発音を示す要素を組み合わせる方法)
・仮借(同音の文字を当て字として使う方法)
・転注(未だ定説

がない)から成っている¹⁰⁾。小川環樹¹¹⁾によると、文字の進化を六書に基づいて考究した時、四つの段階に分けることができるという。すなわち象形と指事が第1の段階、ついで会意が第2の段階、仮借が第3段階で、そして文字全体の表わす語と同意の部分(声符とよぶ)と単語の意義を限定する役割を持つ部分(義符とよぶ)の合体で出来る形声字が第4段階である。なお転注の解釈は古来まちまちであるが、小川は曾國藩の見解を最もすぐれているとし、転注は形声の変種と考えている。

形声字は殷代の甲骨文にも出現するが、その数は少なく、現在解読できる甲骨文字約1,500のうち形声字は半分に達せず、つぎの周代の金文にやや多く見られるようになり、戦国時代の中でも前5～3世紀に急激に増加した。それ以降二千数百年のあいだ漢字はたえず数を増したが、その間の新造語はほとんど形声の方法で造られたものばかりであるとのことである。

肝も膽もいづれも形声字である。

現在、中国の歴史は殷王朝の時代が最も古いとされている。殷王朝は紀元前1700年から同1100年まで約600年つづいた。殷王朝以前の遺跡も少なからず発掘され調査されているが、未だ夏王朝時代の遺跡は確定されていない¹²⁾。

阿辻哲次¹³⁾によると、現在の段階で最も古い漢字は、中国で実在が確認されている最古の王朝である殷の晩期、紀元前1300年頃から紀元前1000年頃にかけて使われた甲骨文字である。小川環樹¹⁾によると、漢字で書かれた資料のうち、今日知られている最も古い確実なものは、殷代の都あと(河南省安陽県)から発掘されたいわゆる甲骨文であって、その年代は前1384～1123年、殷の王朝の後半期である。最近、董作賓氏の推定によると、この甲骨文の原形をなす文字が造り出されたのはそれよりもさらに1500年以前にさかのぼっ

た頃であろうという。通算してみると前2884年、今をさること4800年以前となる。甲骨文は古い文字であるが、すでにある程度進歩した段階にあることは、薫氏がエジプトの初期(3500 B. C. 以前)の絵文字および中国西南部に住む少数民族の絵文字と比較して論証したところである、としている。

阿辻¹³⁾によれば、殷では亀の甲羅や牛の骨を使ってうらないが行われ、うらないがすんでから甲羅や骨にその時のうらないの担当者やうらなった内容などを、当時の文字で刻みつけた、という。

なお殷の時代に使われ文字は決して甲骨文字だけでなく、殷代に作られ青銅器にも銘文(いわゆる金文)が鑄込まれた。また木の札や竹の札に文字を書くことも殷の時代からおこなわれていたことはおそらく確実である。殷を倒した周でも殷と同様に亀甲や獣骨を使ってうらないをおこない、その結果を文字で記していた、という。

小林 孝¹⁴⁾によれば、筆は文字の発生より以前にあったと思われ、紀元前2500年ごろの彩文土器などに描かれている文様は筆のようなもので描かれているからである、という。また甲骨文字は刻みこむ前に毛筆で書かれたといわれている。秦代以前、紙が未だ発期されていなかった時代には、木片や竹片が書写に使われた。いわゆる木簡や竹簡であり、周代末から戦国時代には、帛つまり絹なども書写用に使われ、漆をまぜた墨液で書き、これを漆書と呼んだ。漆を媒介とした墨液は粘着性が強いので、起筆部が太くなりオタマジャクシに似た形になるので、この文字を“蝌蚪文字”と呼んだ。後に膠が媒剤として用いられるようになり、蝌蚪文字は消えた、という。

加藤⁹⁾によると、契文とは甲骨文字のことで、亀甲や獣骨に契刻された文字で大部分が占卜の辞であり、殷の時代のもの、金文は青銅器に鑄込まれたもので殷と周の時代のもの、籀文とは大篆ともいい、周から戦国時代

にかけて周の地方において使われていたものとされる。篆文は「説文解字」に載っている小篆といわれる文字であるとのことである。阿辻³⁾によれば、秦の始皇帝が全国統一の偉業をなすとげ、約200年間つづいた戦国時代を終了させたのは紀元前221年であり、その斬新な政策として度量衡を統一したことと、複雑であった大篆の文字を改良して小篆を作り、これを全国標準の書体としたことがあげられるとしている。

「広漢和辞典」⁸⁾、「漢字の起源」そして「字統」¹⁵⁾によって、肝・膽の古い文字を探したが、いずれも篆文は紹介しているが、契文・金文・籀文は紹介していなかった。五臓六腑について、上記三書をしらべた結果が表1である。五臓六腑のすべてが甲骨文には無いが、心と胃と三焦が金文にあることがわかった。なお「書道全集第一巻」¹¹⁾や「書の宇宙1」¹⁶⁾など目にふれるものは可及的に甲骨文字や金文をしらべたが、肝・膽に相当する古い文字は見出せなかった。無いと断定す

ることは甚だ困難であり、思い余って甲骨文の大家 白川 静先生にうかがった。先生は現在のところ、甲骨文、金文には肝・膽の字は無いとのことであった。

3) 中国における解剖学的事項

小川¹⁷⁾によると、古代の中国医学は、ギリシアやローマの医学とくらべると解剖学を無視しており、中国では古今を通じて一般の人びとが人屍に対して崇敬と恐怖の念を持ち、死体の保全については慎重な手段を講じた、とのことである。しかし果してそうであったのであろうか？ 儒教や仏教がひろまってからは上述のようであったと思われるが、それ以前の殷や周の時代はどうであったのであろうか？

中国史¹⁸⁾では殷代は奴隷社会と規定されており、羌というチベット系の種族を生け捕りにしては奴隷としていた。祭祀を重視した殷では禽獣を犠牲にささげると同時に、人間を殺して犠牲に供した。動物よりも人間の犠

表1. 五臓六腑と古文字

		五 臓					六 腑				
		肝	心	脾	肺	腎	胃	(大・小)腸	胆	膀胱	三焦
漢字の起源	甲骨文 金文 篆文 その他	○	○	記載なし	○	記載なし	○	○	○	記載なし	○
字 統	甲骨文 金文 篆文 その他	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
広漢和辞典	甲骨文 金文 篆文 その他	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○

牲の方が、神や祖先をよるこばせると考えられたようである。卜辞のなかには、羌人を何人殺して供えたといった記録が頻出している。なお白川 静先生のお話では、犠牲としての適否は、外的な障害の有無は勿論のこと、さらに内蔵の良否によって判断されたとのことである。史記の殷本紀¹⁹⁾の帝紂の所で、紂がおじの王子比干を解剖した記事がある。すなわち「紂愈淫亂不止。微子數諫不聽。乃與太師・少師謀遂去。比干日、爲人臣者不得以死争、廼強諫紂。紂怒曰、吾聞、聖人心有七竅。剖比干觀其心。」紂の淫乱はいよいよ甚だしくなっていて、とどめがなかった。微子啓がしばし諫めたが、聞きいれなかったので、太師・少師らと相談してとうとう国外に去った。比干だけはとどまって、「人の家来たる者は、生命を投げ出しても、諫争しなければならぬ」と言って、強く紂を諫めた。すると紂は怒って、「わしは聖人の心臓には七つの穴があると聞いている。試みに比干でこれをためしてみよう」といって、比干を殺し、解剖してその心臓をみた、というものである。さらに別の所に²⁰⁾、「以西伯昌・九侯・鄂侯、爲三公。九侯有好女。入之紂。九侯女不意淫。紂怒殺之、而醢九侯。鄂侯争之疆、辨之疾。并脯鄂侯。」殷では西伯昌・九侯・鄂侯の三人を天子を補佐する主要な大臣という意味で三公としていた。九侯に美しい娘があって、これを紂の妻として入れたが、九侯の女は淫樂を好まなかった。紂は怒ってこれを殺し、九侯を塩漬の肉にした。鄂侯は紂のそのような非行を諫めて強く争い、事の善悪を弁じてはげしく責め立てた。すると、紂は腹を立てて鄂侯をも乾し肉にしてしまった。人を塩漬の肉や乾し肉にしたという上述の記事から、殷の時代には食人の風習があったと考える人もいる²¹⁾。

以上の如く、殷の時代には五臓六腑程度の解剖の知識は十分にあったと考えられる。しかるに、金文に、心・胃・三焦の字はみられ

るものの、甲骨文には五臓六腑に関する字は全くみられない。

4) 肝・膽の字が甲骨文や金文にみられないのは何故であろうか？

白川静氏²²⁾によれば、文字は、人が人に意志を伝達する、あるいは感情を伝えるというような次元のものでなく、神と対話する、神に直接向かうものとして生まれたもので、文字は生まれたときにすでに神聖文字であったと考えるという。古代エジプトのヒエログリフにしてもメソポタミアの楔形文字にしても神との契約であったのである。

甲骨文は、必ず十干十二支に始まり、占いの内容、王の判断やその結果などが記される。甲骨文は既述の薰作賓によって、その刻法の構成上の違いから五期に分類されている。第1・2・3期ごろまでの卜占文は神と王との間の対話であって、貞人（占い人）の名が記されていたが、貞人の名が消えたところから、形は卜占文の姿をとりながらも、実際には、王の記録、あるいは王と諸侯との政治的関係を記す内容となった²³⁾。

甲骨文的占卜は、王が神権的な絶対の存在であるということを確認するための儀式としても行なったもので、単に問うとか、その結果を記録するという行爲でなく、神権を擁護するための一手段としても行われたのである。すなわち占卜の儀式を行なうのは王の周辺の者だけであり、これに参与するのが貞人で、武丁の時代には七十数人の貞人がいたといわれるが、別に書記のみを行なう者がいた。したがって特権的な聖職者階級が秘儀として扱ったもので、一般社会とは隔絶したものであった²⁴⁾、と思われる。

甲骨文的次に登場した文字は殷周代の金文がある。祭礼の器である青銅器に主として鑄込まれた。また時には刻された。殷代から西周初期にかけての青銅器には、出自の証や、包括的共同体（古代宗教国家）における分担

示す記号である氏族標識が、把手の裏側や器の内側（内底や内側面）などに鑄込まれていた。これが周代以降、出自や職制分担を明らかにした氏族標識を鑄込むだけに終わらず、王からの賞賜や冊命など、青銅器作器の事情を記す文を鑄込んだ銘文が生まれ、それが次第に長文化して、春秋戦国期には雅歌や頌歌的な文体を生むことになった。干支を頭に抱いて始まる甲骨上の神との純粋な対話文である甲骨文は、やがて王の自賛文となり、金文では、神と王との誓約関係を王と諸侯の恩賞と誓約関係に現世化した下賜文（作器の由来文）となり、それが長文化して、現世の天子への頌歌、国や一族の歴史文へと発展したのである²⁵⁾。

かくて春秋、戦国時代に入ってようやく文字は普及しはじめ一般社会のものとなったが、同時に書体に地方差が出てきて、さらにこれが相互に影響しあって、まちまちの複雑な書体が使われるようになった。秦の始皇帝による字体の統一が必要となった所似のものである。

以上が、肝・膽の字が甲骨文・金文に無いということについての説明であるが、ある程度納得できるように思われるけれども、直接的な説明ではないので、更に検討をつづける所存である。

文 献

1. 小川鼎三：医学の歴史、中公新書35版 1990.8.30 P.29～31。
2. 杉立義一：医心方の伝来、思文閣 1991.3.10 P.5～6。
3. 金谷 治訳注：莊子 第一册内篇 岩波文庫 第28刷 1990.5.10 P.149～151。
4. 全上 P.203～204。
5. 金谷 治訳注：莊子 第三册外篇・雜篇 岩

- 波文庫 1990.5.25 P.63～65。
6. 陳 瞬臣：中国五千年史（上）講談社 第16刷 1995.2.28 P.22～26。
7. 原田康治：臨床応用 素問・靈樞、緑書房 1996 P.4～6。
8. 諸橋轍次、鎌田 正、米山寅太郎：廣漢和辞典 中巻 大修館書店 昭和57年。
9. 加藤常賢：漢字の起原 白川書店 昭和45年。
10. 阿辻哲次：漢字の字源 講談社 1994.5.10 第2刷 P.232～233。
11. 下中彌三郎編：書道全集第1巻 平凡社 昭和29年9月30日発行 小川環樹：中国文字の構造法 P.7～12。
12. 夏 竊：中国文明の起源 NHK ブックス 昭和60年2月10日 第3刷
13. 阿辻哲次：漢字の文化史 NHK ブックス 1994年11月25日 第1刷
14. 小林 孝：硯の文化—歙州硯と端溪硯から—、大塚薬報 No.501 平成7年8月10日発行 P.3—12。
15. 白川 静、字統、平凡社 1989年12月10日 初版第六刷。
16. 石川九楊編：書の宇宙1 天への問いかけ 甲骨文・金文 二玄社 1996.12.10 発行
17. 11に同じ P.26～27。
18. 6に同じ P.49—53。
19. 吉田賢抗：史記—（本紀）、明治書院 昭和60年8月20日 15版 発行 P.139～141。
20. P.136～137。
21. 16と同じ、P.78～79。
22. 16と同じ、P.62～63。
23. 16と同じ、P.6～32。
24. 16と同じ、P.68～75。
25. 石川九楊編：書の宇宙2。人界へ降りた文字・石刻文、二玄社 1997年1月10日発行、P.12～14。